

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

香りから辿るChrisの性的発達軌道：Lewis Grassie Gibbon の A Scots Quair における性と嗅覚

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2025-03-17 キーワード (Ja): Lewis Grassie Gibbon, A Scots Quair, 香り, 女性 キーワード (En): 作成者: 宮原, 駿 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/0002000318

香りから辿る Chris の性的発達軌道

— Lewis Grassic Gibbon の *A Scots Quair* における性と嗅覚 —

宮 原 駿

要 旨

本稿は20世紀スコットランドの小説家 Lewis Grassic Gibbon の *A Scots Quair* を扱い、ヒロイン Chris の性的な発達過程を香りというモチーフとともに読み解く試みである。まず、Chris の性的な目覚めの様子をジプシーや見知らぬ男、父親との関わりの中に現れる嗅覚の描写をもとに概観する。ここでは、経験の乏しさから性の魅力と恐怖が拮抗する。そして、結婚に結実する性的な成熟を迎えると、Chris は特にスイカズラの香りを通して、夫 Ewan や婚外交渉の相手 Rob との関係を意識する。最後に、出産の経験をどのように Chris が嗅覚的に捉えているか簡潔に見る。興味深いことに、少女の時、Chris は母 Jean の出産の際に嗅覚的な恐怖を感じていたが、自分自身の出産の際には嗅覚へ意識を向けることさえない。香りのモチーフに注意を向けることで、ヒロインの性的な発達過程が見て取れるだけでなく、その際の感情の有り様までが観えるのである。

キーワード：Lewis Grassic Gibbon、*A Scots Quair*、香り、女性

Lewis Grassic Gibbon の長編小説 *A Scots Quair* において女性の経験が重要な構成要素であることは先行研究においても指摘されてきた (Riach 54)。実際、William K. Malcolm は Chris のことを ‘a true feminist icon’ と形容する (Lewis 110)。同様に、先行研究では *A Scots Quair* は Chris をフェミニズム批評の対象として、男性社会や家父長制との関係において論じられている (Lumsden 45; Burton 35, 46; Malcolm, Lewis 110)¹⁾。中でも、Deirdre Burton は「Chris にとっての、また、Chris を通してのはっきりと女性的な『現実』」(‘a recognizably female “reality” for and through Chris’) や「Chris の発展途上の意識」(‘Chris’s developing consciousness’) に注目している (35)。しかし、これらの先行研究はそのタイトルなどにも見られるようにあくまでフェミニズム批評として Chris を対象としており、Chris というキャラクターの個人性に深く踏み込むことはできていないように思われる。このことを踏まえて、本稿では、個人としての Chris に焦点を当てるために、彼女の身体的な感覚、とりわけ嗅覚に注目して、彼女が自身の性的な成長過程をどのように経験するのかについて議論してみたい。

例えば、草花の香りなどに注意を向けてみると、主人公 Chris の性的な成長の過程が窺われ

るのではないだろうか。Hans J. Rindisbacher もフロイトの有名な言葉を引きながら、性と嗅覚の強い結びつきを指摘している (13)²⁾。 *A Scots Quair* を読む上で、嗅覚的な描写を見逃すことは難しい。特に、スコットランドの農村 Kinraddie の生活を扱う第1部 *Sunset Song* にはこうした特徴が色濃く感得されるだろう。実際、作家自身が嗅覚的な描写を好んだことは先行研究においても指摘されており (Malcolm, *A Blasphemer* 136)、Chris が自然界と深く結びついていることも述べられている (Malcolm, *Lewis* 96)³⁾。本稿は、主人公 Chris の性的な成長過程に焦点を当て、これを香りの表現から読み解いていく試みである。性的な意識に目覚めていく思春期から、結婚につながる成熟期まで見ていきたい。加えて、女性としての性的な経験にしばしば伴う出産に対する意識にも着目する。出産というモチーフには生と死が絡み合った経験が見受けられることだろう。第1章では、思春期を迎える Chris が性に目覚めていく様子や、彼女の恋模様が花の香りと共に描写される点を吟味する。第2章において、結婚を中心とした成熟期を扱い、夫となる Ewan にも触れていきたい。第3章では、結婚生活に伴う出産というモチーフを扱う。議論を通じて、香りを介して Chris の性的な発達段階が示される中、出産においてより複雑な主題が交錯することも示したい。

第1章

A Scots Quair は主人公 Chris の人生をその幼少期から語り始める。中でも、彼女の思春期における性の目覚めがしばしば特徴的な香りの描写を伴うことは注目に値する点である。異性に対する好奇心や欲求が様々な香りとともに描写されていく一方、性的な欲望に内在する獣性やこれに伴う恐怖が垣間見られることもある。本章では、Chris の性的な発達段階の初期に見受けられるこのような複雑さを吟味していきたい。

思春期を迎えた頃の Chris は、ある日、父親が農作業のために雇ったジブシーの男の世話をする。小屋に泊まることになった男は、世話をしてくれる Chris にこう語りかける。‘*You’ve never lain with a man yet, lass, I can see, and that’s a sore waste of hot blood like yours. So mind I’m here if you want me, I’ve deflowered more queans than I’ve years to my name and sent none of them empty away*’ (76)。粗野な男が若い娘に投げかけた下卑た欲望の言葉である。しかし、その夜、どうしたわけか Chris の心は揺れ動く。

She [Chris] opened the window then, she liked to sleep with it open, and it was as though the night had been waiting for that, a waft of the autumn wind blew in, it was warm and cool and it blew in her face with a smell like the smell of late clover and the smell of dung and the smell of the stubble fields all commingled. She leant there breathing it.

... And without beginning or reason a strange ache came in her, in her breasts, so that they tingled, and in her throat, and below her heart, and she heard her heart beating, and for a minute the sound of the blood beating through her own head. And she thought of the tink lying there in the barn and how easy it would be to steal down the stairs and across the close, dense black in its shadows, to the barn.

But it was only for a second she [Chris] thought of that [lying with a tink in the barn], daftly, then laughed at herself, cool and trim and trig, and closed the window, shutting out the smells of the night, and slowly took off her clothes, looking at herself in the long glass that had once stood in mother's room. (76-77)

Chris が自室に戻り、寝支度を調べて窓を開けると、秋風に乗って様々な香りが吹き込んでくる。クローバーや刈り株の香りに混じって家畜の糞の匂いも漂ってくる。こうした香りを吸い込むと、「奇妙な疼き」(‘strange ache’) が彼女を捕え、動悸が起こる。我知らず、小屋で眠るジプシーの元に行き、処女を散らすことを夢想するのである。しかし、香りとともに訪れた甘美で危険な空想を振り払った時、Chris は窓を閉めることでそうした香りの一群を閉め出すのである。

夜、自室に吹き込んでくる様々な香りが性的な発達段階にある Chris に働きかけるのである。Havellock Ellis が指摘する香りの力の中には、「連想的な能力」(‘associational facility’) がある (Ellis vol. 1, part 3, p. 55)。クローバーや切り株、家畜の糞の匂いは、農作業を想起させる香りであり、その作業に加わった新しい働き手のジプシーを連想させる。男が発した言葉は悍ましいものだが、依然、性行為が未知の経験である Chris にとっては危険な魅力を持っているのだろう。禁じられている行為への誘惑とともに、想像の埒外にある事柄への好奇心は、Chris の妄想を膨らませる。性的な欲望の対象であるジプシーの男が眼前にいない場面において、香りはこうしたすべてを惹起する引き金となる。Chris は窓を閉めて香りを遮断することで、こうした危険な夢想を断ち切る。その直後、これまでの嗅覚的な夢想とは対照的に、鏡を見つめるという視覚的な行為へと移行するが、これは夢想から目の前に現前する自分の姿へと意識を戻すことで平常心を回復しようとする試みと言えよう。このことは、*« La prégnance de la spiritualité de la vue fut toujours plus énergiquement opposée à l'animalité du flair. »* (Munier 17) と言われるように、視覚の精神性と嗅覚の獣性が対照される点からも理解されるかもしれない。

その後のある晩のこと、Chris は帰り道に暗闇で不意に知らない男にキスされる。蹴りを入れることで、辛くも男の魔の手から逃れるものの、強姦されてしまう可能性も否めない状況であった。しかし、何故かその晩 Chris の心は性的な魅惑に揺り動かされることになる。

and lying that night in her bed between the cold sheets, curled up so that she might rub her white toes to some warmth and ease, it was in her memory like being chased and bitten by a beast, but worse and with something else in it, as though she'd liked the beast and the biting and the smell of that sleeve around her neck and that soft, unshaven face against her own. Sweet breath he had had anyway, she thought, and laughed to herself, that was some consolation, the tink. And then she fell asleep and dreamed of him, an awful dream that made her blush even while she knew she was dreaming, she was glad when the morning came and was sane and cool and herself again. (96-97)

夜、寝具の中で記憶を辿ってみると、Chris には男との事件が、獣に追いかけられ、噛みつかれたようなもののように感じられる。先の引用における Brigitte Munier の言葉でも嗅覚と獣性は結びつけて考えられており、男という獣に襲われそうになった Chris がその経験を嗅覚的に想起することは興味深い。また、C・ブラックリッジ曰く、「嗅覚は常に性的感覚の一種だと考えられてきた。それも最も親密で、最も動物的な性的感覚である。ルソーに言わせれば、嗅覚とは「記憶と欲望の感覚」なのである。匂いは強力な性的刺激剤であるとみなされてきた」(363)。男の腕に捕えられた時、その袖口から漏れ出る男の体臭や、柔らかい髭の感触が彼女には好ましく思われる。特に、彼女が独り言つのは男の呼気の甘い香りのことである。このような自分を一笑に付して眠りにつくものの、酷い夢を見て赤面してしまう。夢の具体的な内容は明示されないが、その晩の事件や、男に対する性的な欲望や好感、Chris の赤面などを考慮するならば、男とのキス以上の関係性が夢に立ち現われたと見ても強ち的外れとは言えないだろう。

このように男の獣性が嗅覚的に好ましく知覚される背景には、Chris に未だ性的な経験がなく好奇心がかき立てられていることがある。しかし、その一方で、無知故の恐怖も嗅覚を通じて描き出されている。妻の死後、寝室で1人になってしまった Chris の父 John Guthrie は眠れずに歩き回る。

But one night she didn't dare sleep, for up in the room he'd shared with mother she heard John Guthrie get out of bed and go slow padding about in his stocking soles, like a great cat padding there, a beast that sniffed and planned and smelled at the night. And once he came soft down the cowering creak of the stairs and stopped by her door, and she held her breath, near sick with fright, though what was there to be feared of? (78)

まるで夜気の匂いを嗅ぐ獣のように、父が部屋を歩き回る音が眠れない Chris の元へ響いてくる。ここでも獣性と嗅覚の関連 (Munier 17) が見られる。この獣と化した父は彼女の部屋の扉

の前にやって来る。Chris は恐怖を感じるが、何故なのか理解できない。性に目覚め始めたばかりの彼女にとって、若い男が自分に性的な欲望を向けてくることは理解できるだろう。しかし、父が娘に対してそうした欲望を向ける可能性に思い至るほどには性に対する理解は深まっていない。

性に目覚め始め、好奇心と不安感が混在する不安定な段階を経て、Chris は将来の夫 Ewan との恋に落ちていくことになる。雷雨の中、牧場の馬を救助した後に家へと帰る道すがら、彼に対する気持ちが打ち解けていく (‘she’d never again be shy with Ewan Tavendale’ [137])。この短い道中に、春の香りが2人を包む (‘it smelt like Spring . . .’ [137])。この香りはその直後に具体的な花の香りとなって立ち上る。‘There was a great power of honeysuckle that year, the smell of it drenched all the close in wet, still weather, it perfumed the night and that kiss, she [Chris] wouldn’t ever forget them both though she lived unknissed again till she died’ (138)。Ewan とのキスは中庭を浸すようなスイカズラの芳香に伴われ、生涯忘れられない経験として Chris の心に刻まれる。

このように、性へと目覚めていく Chris の意識は嗅覚的な感性から巧みに描き出される。性的な意識が目新しいものである故の好奇心と恐怖心は、両義的なニュアンスを兼ね備える獣性と絡み合う嗅覚的なモチーフを通して描かれる。後には、彼女が性的に発達していく中で、嗅覚は将来の夫との忘れがたい経験を捉える重要な感覚でもある。

第2章

これまで性的な目覚めを経験してきた Chris の意識は徐々に成熟へと向っていく。物語の流れにおいては Ewan との結婚によってその成熟期が示される。ここで注目すべきは婚前の Chris が香りを通じてこれまでの自分と決別し、結婚後の自分を意識することである。本章では、Chris の結婚を中心に据え、まず性的な成熟を向かえつつある彼女の意識を読み取りたい。そして、Ewan との絆を、他の男性との関係性とも嗅覚的に比較する。

結婚直前の朝、自室にいる Chris は結婚生活で身に着ける下着類を引き出しから取り出してみる。そわそわと落ち着かない中、新しい下着の香りを嗅いでみる。‘[T]hey smelt fine, she buried her face in them, so lovely they were and the queer feeling they brought her. And she changed her mind, she couldn’t wear anything now she’d be wearing when she was married, she put on her old things and her old skirt and went down the stairs . . .’ (149)。匂いを嗅ぐ直前、Chris は新しい下着に着替えるつもりだった。しかし、その香りを嗅いだ後、彼女の気持ちは変わる。結婚前のこの瞬間、彼女は結婚後に身に着けるものを着ないことに決め、古い衣服に身を包み階下へ向う。新しい下着類が纏う香しい香りは彼女の結婚生活に属するもの

であって、現在の未だ独身の生活に持ち込むべきではない香りだと理解したのである。つまり、未来の生活に属するものとしてこうした香りを認識するのである。

結婚の宴の直前、Chris は結婚のための新しい衣服に着替える。その後、Chris がほんの少し香水をハンカチに振りかけて身支度を終える場面がある。‘She found herself a hanky, last, and sprinkled some scent in that, only a little; and hid it away in her breast and went down the stairs just as she heard the first gig drive up’ (151)。これまでの生活で着ていた衣服を脱ぎ捨て、結婚生活を象徴する新しい衣服を身に着けて、最後の仕上げに香水を振りかけるのである。この所作は一見何気ない女性としての身だしなみに過ぎないように思われる。しかし、実のところ、物語のこの時点まで Chris が香水を使うといった描写は一切ないのである。このことから、Chris がはっきりと独身生活と嗅覚的な手段を以て決別したことが窺われ、その芳香のするハンカチを胸元に密やかに忍ばせる仕草には女性的な嗜みが見受けられることだろう。

匂いという観点から Chris の結婚を見る時、否応なく注意を引く奇妙な描写がある。先の引用において Chris が新しい衣服ではなく古い衣服を身に着けた直後のことである。彼女は牧場に家畜の世話をしに行く。ふと小屋の中を覗き込むと、2匹の大きな鼠がいる。‘and there in the barn when she peeked in it, right in the middle of the floor were two great rats, sitting up on their tails, sniffing at each other’s mouths, maybe kissing . . .’ (149)。床の真ん中で2匹の鼠が互いの口元をくんくんと嗅ぎ合っている。Chris にはキスしているように思えるが、読者にとってはこの後に新婚生活に入っていく Chris と Ewan を体現しているかのように暗示されるだろう。先に触れたように、嗅覚と獣性は関連付けられるが (Munier 17)、Chris と Ewan の結婚は鼠の番いに象徴されることで動物的なつながりとしても意識されることになる。2人が精神的にだけでなく、動物として身体的にも強く結び付いていることが暗示されているのである⁴⁾。

実際、‘he could smell the weather’ (30) と述べられるように Ewan もまた鋭い嗅覚を持つ。しかし、Ewan の死後、Chris が再婚する相手 Robert Colquhoun は Chris がスイカズラの香りに注意を向けても、全く関心を示さない (‘But Robert was giving no heed to smells’ [309])。また、第3の夫となる Ake Ogilvie は Glasgow の工業的な悪臭への嫌悪を示したり (544-45)、海上の生活を夢見て磯の香りを夢想したりするものの (546)、実際に具体的な香りへの愛着を示すことはない。一方、Kinraddie 村を包んでいたスイカズラや家畜の糞の匂いに対する嗅覚的特性を共有する Chris と Ewan の2人の結婚生活は短いながらも幸せなものとして描かれる。Chris と Ewan は香りに対する鋭い感性を共有する夫婦なのである。

残念ながら、Chris の視点で物語が進行するために、Ewan が Chris から発散される香りに注目するような描写はない。しかし、結婚の宴の際、Chris は Ewan の衣服から立ち上る香りに好印象を抱く。‘[S]he and Ewan stood side by side, he was wearing a new suit, tweed it

was, and smelt lovely, his dark face was solemn and frightened than she was herself' (153)。Chris は Ewan の衣服の香りに好ましい印象を抱いている。この香りが敢えて言及されることを鑑みれば、結婚のために用意した衣服の香りは Chris にとって「鼻」新しいものだったのだろう。Ewan もまた新婦の香水の香りに気付いたはずである（しかし、あまりにも緊張している様子の Ewan にはそのような余裕はなかったかもしれない）。対照的に、Chris にキスをする Chae は酷い煙草の匂いがするし、Rob に関しては匂いの描写すらない (154)。

しかし、後に Chris は夫 Ewan ではなく、Rob と関係を持つことになり、2 人の性行為は特徴的な香りとともに描かれる。Ewan との新婚生活は、第 1 次世界大戦の勃発によって唐突に終わりを告げる。戦時の雰囲気は駆り立てられて、Ewan は出征する。その後、一次的に休暇で戻ってくる Ewan を Chris は待ち侘びるが、帰ってきた Ewan はまるで別人に変貌していた。自分に対して乱暴に振る舞う夫を Chris は家から追い払ってしまう。夫と喧嘩別れをしてしまった Chris はその寂しさを Rob の存在で埋めることになる。

And she [Chris] never knew when and how in the days that followed, it came on her silently, secretly, out of the earth itself, maybe, the knowledge she was Rob's to do with as he willed, she willed. She wanted more than the clap of his hand on her shoulder as they finished the bout at evening and up through the shadows took their slow way, by parkside and dyke, to the close that hung drenched with honeysuckle smell. (228)

夫の不在時に農場の手伝いに来てくれるようになった Rob に対して、Chris は徐々に愛情を芽生えさせ、自分は Rob のものだと感じるようになっていく。先の結婚の宴の場面において Chae に対するのとは異なり、Rob に対しては嗅覚的な悪印象を何も感じていなかったことには一言しておきたい。野良仕事を終えて、家の中庭まで戻ってくるとそこはスイカズラの芳香に満たされている。Ewan とのキスの場面においてもスイカズラの香りが漂っていたことは先に触れたが、Chris が相手に性的に惹かれている場面はこの花の香りによって示される傾向が見受けられる。しかし、婚外交渉である Rob との関係には Ewan との関係には見られないクローバーの香りが付随することも見逃せない (229)⁵⁾。

ここまで Chris が性的な欲望の対象とする異性との関係を嗅覚的に認識している点に触れた。また、結婚生活へと入っていくプロセスを新しい香りに身を包むことで明瞭に意識していることも明らかになった。さらに、身に纏う香りとして衣服や香水が描かれる一方で、鼠の番いのイメージには 2 人の動物的な側面も見取れる。このように、成熟した Chris が様々な香りを通じてその性的な経験を経ていく様が看取されるだろう。

第3章

最後に、結婚後の Chris が経験する出産と嗅覚の関係を簡潔に捉えて締めくくりたい。結婚後の Chris について考える上で、彼女の独身時代の香りに触れることも肝要である。また、出産とのつながりで亡くなる母 Jean が不可欠な要素となる。

まずは Chris の出産の場面を見てみたい。夫 Ewan との間に生まれる息子の Ewan がまさに誕生する時である。‘Chris tried; it was torment: the beast moved away from her breasts, scrabbled and tore and returned again, it wasn’t a beast, . . . she cried out again, ringingly, deep, a cry that ebbed to a sigh, the cry and the sigh with which young Ewan Tavendale came into the world in the farm-house of Blawearie’ (189)。これまでも触れてきた人間の獣性は、母の胎内から這い出てこようとする赤子の姿に改めて体现されている。奇妙なことに Chris はこれまで嗅覚的な感性を示し続けてきたにもかかわらず、この時点においては匂いに対して注意を向けていない。彼女の心は出産の痛みに集中しているのである。

この場面を理解する上で、性的な成熟を迎える前の Chris に触れる必要がある。母 Jean が双子を出産する際、Chris は出産の立ち会いをさせてはもらえない。しかし、出産のためにやってきた医師とすれ違う。‘the doctor passed them with his hands held away from them, and the smell of his hands was a horror that haunted Chris for a day and a night’ (44)。医者が出産の際の血に汚れた手を兄 Will と Chris から遠ざけながら通り過ぎるが、その手から漂う香りは彼女にとって恐怖そのものとして丸1日付き纏うことになる。子どもの Chris は見ることができない、得体の知れない出産という行為は、その香りさえ悍ましいものとして提示される。しかし、Chris は性的に成熟したことで——出産の痛みに紛らわされているとはいえ——その香りに対して注意さえ向けなくなるのである。

A Scots Quair における出産において忘れてはならないことは、そこに生と死が明瞭に付き纏うことである。出産に生命の誕生が伴うことは確かなことであるが、そこには同時に死の影がちらつく。例えば、母 Jean は生んだばかりの双子とともに自殺してしまう。Chris は夫 Ewan との間には元気な男の子を設けることができるが、2番目の夫 Robert との間の赤子は亡くなってしまう。これまでスイカズラの香りなどによって表現されてきた性的な成熟の先にある出産に、こうした死のイメージが暗雲を落としていることは注目に値する点だろう。実際、Douglas Gifford は死を *A Scots Quair* の主題とし、Gibbon と Chris がともに死に取り憑かれており、同じように恐怖に囚われていると述べる (73, 91, 93-94)⁶⁾。

こうしたことを念頭に、少女の時の Chris が母の出産に伴う匂いに恐怖を感じたことを改めて見てみたい。出産に伴う死の危険を彼女は血の匂いから本能的に感じたのではないかと考えられる。出産の現場に入れてもらえないことも事態の深刻さを伝えているかもしれないが、先

に触れた女性に特有な、Chris にとって未知の出来事である出産に対する恐怖においては、血液の香りによってこうした死の可能性への恐怖が Chris の潜在意識に語りかけていると考えてもおかしくはないだろう。しかし、先に述べたように実際に自分自身が出産を迎えたとき、Chris はその痛みに意識を持って行かれているが、それ以上に成熟し知識を備えた段階での出産は新しい生命を生み出すという肯定的な側面に彩られていることもあって、死を偲ばせる出血の匂いに意識が囚われることもなくなっているのである。つまり、性的に成熟を迎えているからこそ、出産における恐怖の香りに向き合うことができるようになっているのである。

このように、未成熟な時と、性的な成熟を迎えた後では出産に対する知覚の仕方がまるで異なるのである。少女時代には未経験かつ無知である出産という現象について、それに伴う匂いを介して恐怖を感じているが、結婚後、Chris は経験と知識から果敢に出産に挑んでいく。そのために、母の出産の際には恐怖の対象となっていた血の匂いは、全く意識に上ることもなく、新しい命を生むという出産に伴う痛みにのみ注意を向けられるようになっているのである。Chris の出産のみに目を向けた場合はそれを嗅覚的に読み解くことは難しいが、母 Jean の出産と併置することで Chris の出産における嗅覚的描写の不在が意味を持つのである。

これまで見てきたように、*A Scots Quair* において、主人公 Chris の性的な成長は嗅覚的な描写によって段階的に示されてきた。思春期を迎えた頃には、ジプシーや父の様子が Chris に対して得体の知れない魅力と脅威を示していた。しかし、徐々に性的に成熟していくと、スイカズラの香りを中心に草花の香りが常に肯定的な性の香りとして知覚されるようになる。加えて、結婚後の生活を意識する際にも見られたように、意識的に嗅覚を駆使するようになっていく。特に、香水の使用は香りを自律的に使用する際立った例である。さらに、女性特有の経験である出産も、それが未知であった少女の頃にはそこに伴われる香りに恐怖を感じる他ないが、性的な成熟を迎えたことでそうした香りには意識すら向かないようになる。このように見てみると、Chris が性的に未成熟な段階においては、性に纏わる嗅覚的なモチーフは度々恐怖を喚起するが、成熟するに従いそうした恐怖は消失し、性的な香りは肯定的な価値を帯びていくのである。Chris の生活に現れる芳香は、その受容のされ方によって彼女の性的成熟段階を効果的に示し、付随する感情的側面を示唆していると言えるだろう。

謝辞：本研究は JSPS 科研費課題番号 JP22K13084 の助成を受けたものである（研究種目名「若手研究」、研究課題名「イギリス大戦間期文学における嗅覚の表象」）。

注

- 1) Alison Lumsdenは*A Scots Quair*のフェミニズム批評の歴史を簡潔にまとめている(41)。
- 2) Rindisbacherが引くフロイトの有名な言葉はおおよそ以下のものである。‘... with man’s adoption of an upright posture and the devaluation of his sense of smell, the whole of his sexuality ... was in danger of becoming subject to organic repression ...’ (Freud 54-55)。
- 3) MalcolmはGibbon作品全般において、ヒロインと自然界との肯定的な関係性に触れ、Chrisは自然との調和的な関係性を持っていると述べる(Lewis 110)。
- 4) WhitfieldはChrisとEwanの結婚について次のように述べる。‘She then experiences a brief period of joy and fulfilment in her marriage. In this central part of *Sunset Song* we are conscious of a wholeness, an innocence, and an equilibrium which is the gift that the rural world should ideally contain’ (85)。これはChrisとEwanの肯定的な結びつきの裏書きとなる指摘である。
- 5) Giffordは「夢」という言葉が使われていない点に触れ、‘The significance of this is that with Rob she has touched reality and truth, without, perhaps, ever after fully realising it’ と述べる(98)。
- 6) Chrisの心が死に付き纏われていることについてはWhitfieldも述べるところである： ‘In her mind the motif of *vanitas* grows ever stronger: the obsession with impermanence, and the recurring vision of death waiting behind all human endeavour’ (88)。

参考文献

- Burton, Deirdre. “A Feminist Reading of Lewis Grassie Gibbon’s *A Scots Quair*.” *The British Working-Class Novel in the Twentieth Century*, edited by Jeremy Hawthorn, Edward Arnold, 1984, pp. 35-46.
- Ellis, Havelock. *Studies in the Psychology of Sex*. 2 vols, Random House, 1942.
- Freud, Sigmund. *Civilization and Its Discontents*. Translated by David McLintock, Penguin Books, 2004.
- Gibbon, Lewis Grassie. *A Scots Quair : Sunset Song, Cloud Howe, Grey Granite*. Polygon, 2006.
- Gifford, Douglas. *Neil M. Gunn and Lewis Grassie Gibbon*. Oliver and Boyd, 1983.
- Lumsden, Alison. “ ‘Women’s Time’ : Reading the *Quair* as a Feminist Text.” McCulloch and Dunnigan, *A Flame*, pp. 41-53.
- Malcolm, William K. *Lewis Grassie Gibbon*. Northcote House, 2023.
- . *A Blasphemer and Reformer: A Study of James Leslie Mitchell / Lewis Grassie Gibbon*. Aberdeen UP, 1984.
- Munier, Brigitte. *Odeurs et parfums en Occident: Qui fait l’ange fait la bête*. Le Félin, 2017.
- Munro, Ian S. *Leslie Mitchell: Lewis Grassie Gibbon*. Oliver and Boyd, 1966.
- Rindisbacher, Hans J. *The Smell of Books: A Cultural-Historical Study of Olfactory Perception in*

Literature. U of Michigan P, 1992.

Whitfield, Peter. *Grassie Gibbon and His World*. Aberdeen Journals, 1994.

ブラックリッジ、C。『ヴァギナ 女性器の文化史』藤田真利子訳、河出書房新社、2020年。

(みやはら・しゅん 外国語学部助教)